

令和元年6月13日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K02299

研究課題名(和文)動物と現代芸術-社会的エコロジーと表象の政治学

研究課題名(英文)Animal and Contemporary Art: Politics of Social Ecology and the Representations

研究代表者

清水 知子 (SHIMIZU, Tomoko)

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00334847

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、芸術と環境、人間と動物の関係が科学技術の進展とともにいかに変容したのかを哲学、人類学、社会学、自然科学の知見を横断しながら明らかにするものである。グローバルに生態環境が変容するなかで各国の研究機関、研究者と連携しながら学際的な研究として展開させることを目指した。その成果として、現代アートにおける動物の表象とそのイメージが歴史的にどのように変化してきたのかを政治的、文化的な背景から再考し、また国内及び海外のアーティストらが具体的にどのような作品を生産し、それがどう受け容れているのかを考察した。資料調査、インタビュー調査を行い、バイオアートの展開と生資本主義との関係を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

デジタル・テクノロジー、生命科学、生命工学、バイオアート、思弁的实在論をはじめとする様々な分野の研究の進歩により、もはや「生」、「生命」は単純に「自然」、あるいは「生物学的」なものとして考えることは不可能になっている。本研究を通じて、ロージ・プライドッティのポストヒューマンをめぐる理論、ダナ・ハラウェイのクトゥール-新世をめぐる議論を再考し、生資本主義と生命についてバイオアート及びスペキュラティブ・アートと呼ばれる領域で展開している事象の可能性と陥穽を検証した。またいわゆる人新世と言われる現代社会において、人間の意識や解釈とは関係なく存在する人間ならざるものとの相関性を考えていく必要を示した。

研究成果の概要(英文)：The aim of this research is to consider how the relationship between art and the environment, especially the relationship between human and animal has changed with the progress of science technology, crossing philosophy, anthropology, sociology and natural science. During these three years, conducting research on materials and literature, interviews with artists, curators, art museums and zoos, I reconsidered the development of bioart and analyzed the relationship between bio capitalism and art. The results were presented at an international conference and also published some papers.

研究分野：文化理論、メディア文化論

キーワード：動物 芸術 生資本 生政治 デジタル社会

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

動物については、哲学、芸術、文学、人類学、社会学、自然科学においてさまざまな研究がなされてきた。人文学の領域においては、ジョン・バージャーの「なぜ動物を観るのか」をはじめとし、ジャック・デリダの『動物を追う、ゆえに私は動物である』、『獣と主権者』やジョルジョ・アガンベン『開かれ-人間と動物』など、動物と人間の関係において、見る/見られるという不均衡な権力関係が多角的に論じられてきた。また科学文化論、フェミニズムの立場からは、『霊長類学的ヴィジョン』において動物と植民地主義の関係について考察し、『伴侶種宣言: 犬と人の「重要な他者性」』、『犬と人が出会うとき—異種協働のポリティクス』において動物と人間をめぐる新たな見解を提示したダナ・ハラウェイ、また『動物の解放』において動物の権利を考察したピーター・シンガーなどが代表的である。

こうしたなか、近年、グローバルな環境の変化及び科学技術の進展にともない、人間と動物をめぐる関係が大きく変容し、その見解も見直されつつある。とりわけいち早くこのテーマに多角的に挑んできたのが現代アートである。マーク・ダイオン(アメリカ)の「驚異の部屋」、死んだ動物(鮫、牛、羊)をホルムアルデヒドによって保存したダミアン・ハースト(イギリス)による「ナチュラル・ヒストリー」シリーズ、ストリート・アーティスト、バンクシー(イギリス)による「Sirens of the lambs」、蔡國強(中国)の「狼のレプリカ」、ゴミ袋の動物を都市に立ち上げるジョシュア・アレン・ハリス(アメリカ)の「エア・ベア」、人間と動物、自然と人工の境界認識を探求するパトリシア・ピッチニーニ(オーストラリア)、チェルノブイリ原子力発電所事故以後その地に生息する野生の動物たちを写し出してきたゲルド・ラドウィックの「チェルノブイリの長い影」など、変貌する生地環境のなかで、数多くのアーティストらが、政治、社会、環境をテーマに動物を用いた創作活動に取り組み、現実には生じているさまざまな矛盾に訴えかけている。にもかかわらず、グローバルなレベルで興隆している動物をめぐる現代アートについて詳細に論じた研究は未だ開拓されていない。

本研究では、現代アートにおける動物をめぐる創作活動について、アーティスト、美術館、及び観客へのインタビュー調査を行いながら、その社会的、芸術的意義を明らかにしていくことにした。

本研究はこうした問題意識から、動物とそのイメージの変容を踏まえつつ、現代社会における芸術と動物をめぐる創作活動に焦点をあて、その生産と受容の全体像を明らかにすることを目指した。

2. 研究の目的

本研究は、現代社会において芸術と環境、動物と人間の関係がどのように変化しつつあるのかを明らかにしていくものである。とりわけ、グローバルに生態環境が変容するなかで各国の研究機関、研究者と連携しながら学際的な研究として大きく発展させることを目指す。主な目的は次の二点である。第一に、現代アートにおける動物の表象とそのイメージが歴史的にどのように変化してきたのかを政治的、文化的な背景から精査し明白にしていくこと。第二に、その経緯をふまえたうえで、国内及び海外のアーティストらが具体的にどのような作品を生産し、それがどのように受け容れられているのかを地政学的に考察することである。

3. 研究の方法

本研究の方法は以下の3点による。(1) 動物と芸術をめぐる理論的考察を資料収集及び、アーカイブ、文献読解を通じて明らかにする。とりわけ哲学、思想的に動物と芸術の関係についてどのような議論が展開されたのかを再考する。(2) 従来の欧米の動物と社会をめぐる芸術プロジェクトがテクノロジーの進展とともに、どのように制作方法が変化してきたのか、また同時代の文化政策とはどのような関係にあったのかを踏まえながら考察する。(3) 欧米及び東アジア諸国のアーティスト、美術館、博物館、ギャラリー、動物園、大学機関、文化・行政機関、メディア機関の現場への聞き取り調査を行い、動物と社会をめぐる歴史的経緯と視点の差異、受容、現代社会における芸術プロジェクトの意義と可能性、問題点を考察する。

4. 研究成果

近年、人間と自然をめぐる様々な葛藤は従来の人文科学、自然科学では捉えきれないダイナミズムを有している。イギリスの哲学者ティモシー・モートンによれば、エコロジカルであるということは私たち人間の存在を徹底して見直すことだという。人間の活動によって地球環境が大規模に変動した、いわゆる人新世と言われる現代社会に生きる私たちは、人間の意識や解釈とは関係なく存在する人間ならざるものとの相関性を考えていく必要がある。本研究は、こうしたなかにおいて、芸術と環境、動物と人間の関係がどのように変化しつつあるのか、その系譜学を再考するとともに、バイオアートをはじめとする芸術と科学の遭遇に着目し、人間と人間ならざるものとの関係性の変容をどのように捉えていくべきなのかを具体的な芸術作品をもとに明らかにしていくものであった。本研究は、自然を礼賛するエコクリティシズムとは一線を画し、マルクス、ハイデガー、ベンヤミン、アドルノ、デリダ、フーコー、アガンベンといった哲学的な視点から、動物論及びエコロジー論を再考すると同時に、環境汚染、地球温暖化など、グローバルに生態環境が変容するなかで国内、海外のアーティストが具体的にどのような芸術を生産し、またそれがどのように受け容れられているのかを文学、映画における動物の表

象を比較しながら、現代アート作品を考察し、理論的、実践的に解読していった。各国の研究機関、研究者と連携しながら学際的な研究として掘り下げ、新たな理論的地平を切り拓くことで、動物と芸術、生命と芸術について次世代に向けた新たな提言を提示できることを目指した。

デジタル・テクノロジー、生命科学、生命工学、バイオアート、思弁的実在論をはじめとする様々な分野の研究の進歩により、もはや「生」を単純に「自然な」ものとして、あるいは「生物学的」なものとして考えることは不可能になっている。こうしたなか、現代芸術は生命と人間、生命と物質、生命と情報など、様々な関係を持ちながら新たな展開を迎えている。

本研究では、生命と芸術をテーマにしたプロジェクトについてアーティストへのインタビューと作品分析を通してその社会的意義を考察した。まず作品プロジェクトの成立過程と社会背景を調査し、資料を分析したうえで、アーティストへのインタビュー調査を実施した。またその作品ないしプロジェクトがじっさいの展覧会においてどのように受容されたのかについて、学芸員、文化政策諸機関、観客へのインタビューを実施し、彼らの理解に関して質的調査を実施した。これらの調査をふまえ、動物をめぐるイメージやイデオロギーがどのように選択、想像、解釈されたのかを明らかにした。本研究では芸術と科学が交差する地平をめぐる様々な芸術作品に焦点をあてながら、人間の活動が地球環境に深刻な影響を及ぼす地質年代「人新世」(パウル・クルツェン)において、またミシェル・フーコーが「生政治」と呼ぶ現況のなかで、私たちの生のあり方、あるいは生命という概念そのものがどのように変容しつつあるのか、その「生の技法」の現代的転回を、人間のみならず、人間ならざるものと共存という観点から従来の「文化」と「自然」の概念がどのように更新されているのかを探究し、その成果を国際学会での発表及び論考として刊行した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 7 件)

清水知子「「現れの政治」が「忘却の穴」に突き落とされる前に考えるべき三つのこと」、『現代思想』47-3、2019、109-113、査読無

清水知子「Face Value 時代の生と倫理」、『福音と世界』、2019年2月、pp.12-16、査読無

清水知子「パロディとしての父の誘惑 欲望と「享樂の政治」を再考する」、『思想』1133、2018、pp.59-78、査読無

清水知子「社会とアート」(特集 これからの美術がわかるキーワード100) 『美術手帖』69(1062)、2018、pp.72-77、査読無

清水知子「デイヴィッド・シュリグリー-David Shrigley」アーティスト・インタビュー聞き手 『美術手帖』70(1063)、2018、pp.157-171、査読無

清水知子「「嘘」の時代に生きる私たちへ ハリド・アルバー展」、『美術手帖』69(1056)、2017、pp.178-179、査読無

清水知子「危機の時代のお伽噺 J・K・ローリングと魔法社会の論理」、『ユリイカ』48巻18号、2016、pp.71-78、査読無

〔学会発表〕(計 12 件)

Tomoko Shimizu, "Art in a Time of Biopolitics: Ecologies of Critique," CCCA Workshop: Site, Material, and Medium in Socially Engaged Art (招待講演) 2019年3月3日、オーフス大学(オーフス、デンマーク)

清水知子「危機の時代の芸術と公共性 生政治・デジタルメディア・身体」, Mittagsforum (招待講演) 2019年1月10日、ベルリン自由大学(ベルリン、ドイツ)

Tomoko Shimizu, „Art and Activism in the Age of Crisis,“ Mitglieder laden Mitglieder ein: Japanische Spuren in Bonn (招待講演) 2018年10月5日、ボン大学(ボン、ドイツ)

Tomoko Shimizu, "Animal, Art and Biotechnology in the Era of Anthropocene," (Un)Common Worlds Human-Animal Studies Conference, 2018年8月8日、

トゥルク大学 (トゥルク、フィンランド)

Tomoko Shimizu, "Bio-Art and After : Medium in the Transhuman Age", Crossroads conference, 2018年8月14日、上海大学 (上海、中国)

Tomoko Shimizu, " "Frankenstein's Cat" and Beyond: Animal, Art and Technology," International Conference on Environmental Humanities Stories, Myths, and Arts to Envision a Change, 2018年7月3日、Alcalá de Henares (スペイン)

Tomoko Shimizu, "Animal and the Politics of Landscape in the Bio-political Times" Knowledge Culture and Ecology Conference, 2017年11月16日、Diego Portales 大学 (Diego Portales, チリ)

Tomoko Shimizu, "Re-thinking Transnational Imagination and Diaspora Art" Inter-Asia Cultural Studies Conference, 2017年7月30日、Sungkonghoe 大学 (ソウル、韓国)

Tomoko Shimizu, "Bare Life and the Politics of Fiction : A Genealogy of Art and Migration," Crossroads in Cultural Studies, 2016年12月15日、シドニー大学 (シドニー、オーストラリア)

清水知子 「アブラカダブラ の呪縛—ディズニーの文化の疫学」、日本映画学会シンポジウム 『<汚>の映画史』(招待講演) 2016年11月26日、大阪大学 (大阪府、吹田市)

Tomoko Shimizu, 「難民と現代アート」、Tendenz der japanischen Gesellschaft und Kultur nach Dem, 2016年09月27日、ボン大学 (ボン、ドイツ)

Tomoko Shimizu, "The Work of Media Art in the Age of the Refugee," London FILM and Media, 2016年07月09日、ロンドン大学 (ロンドン、英国)

[図書](計 10 件)

清水知子 『映画とジェンダー／エスニシティ』塚田幸光編、332頁 (担当 pp.3-28) ミネルヴァ書房、2019

清水知子 『これからの美術がわかるキーワード 100』美術手帖編集部編、148頁 (担当 pp.82-87) 美術出版社、2019

清水知子 『アニメーション文化 55 のキーワード』須川亜紀子他編、288頁 (担当「帝国主義、愛国主義—プロパガンダアニメからアニメーション・ドキュメンタリーへ」120-123、「アメリカ ディズニー —成功と挫折の果てに」132-135、「アメリカ フライシャーとワーナー —ディズニーのライバルたち」136-139) ミネルヴァ書房、2019

清水知子 『マテリアル・セオリーズ』北野圭介編、306頁 (担当「メディアテクノロジーと権力 ギャロウェイ 『プロトコル』をめぐって」pp. 84-89) 人文書院、2018

清水知子 『ドイツとの対話 3.11 以降の社会と文化』ハラルド・マイヤー、西山崇宏、伊藤守編、251頁 (担当「動物と亡霊—破局の時代の生存のエクリチュール」pp.55-76) せりか書房、2018

清水知子 『芸術と労働』白川昌生、杉田敦編、236頁 (担当「人間の終焉」のあとで一動物・芸術・人工知能」pp.205-222) 水声社、2018

清水知子 『多元主義を理解するための 30 冊』暮沢剛巳、清水知子監修、BA コンソーシアム編、958頁、BA コンソーシアム、2017

清水知子 『21 世紀の哲学をひらく—現代思想の最前線への招待』齋藤元紀、増田靖彦編、296頁 (担当「性／生の可能性を問う政治哲学—ジュディス・バトラーの思想」pp.215-228) ミネルヴァ書房、2016

清水知子『社会的分断を越境する』塩原和良他編、281 頁（担当「風刺と宗教—ポスト世俗化時代のデモクラシー」pp.196-213）青弓社、2016

清水知子『帝国と文化』江藤秀一編、510 頁（担当「動物と帝国—ディズニーと野生のファンタジーの行方」pp.232-256）春風社、2016

〔産業財産権〕

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2) 研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。